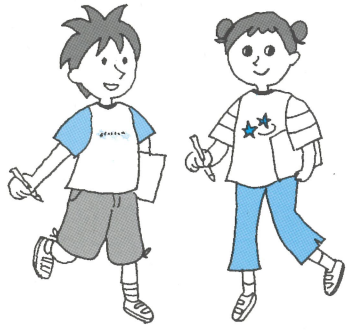
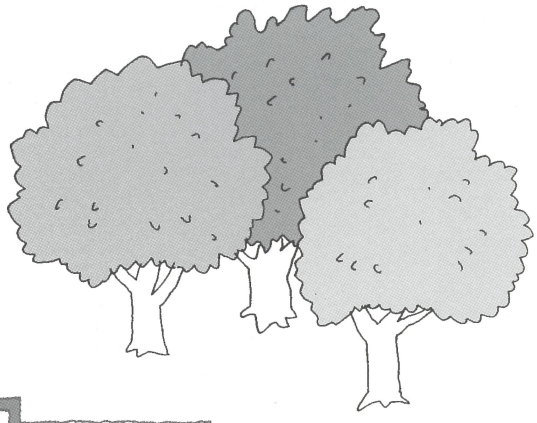
15

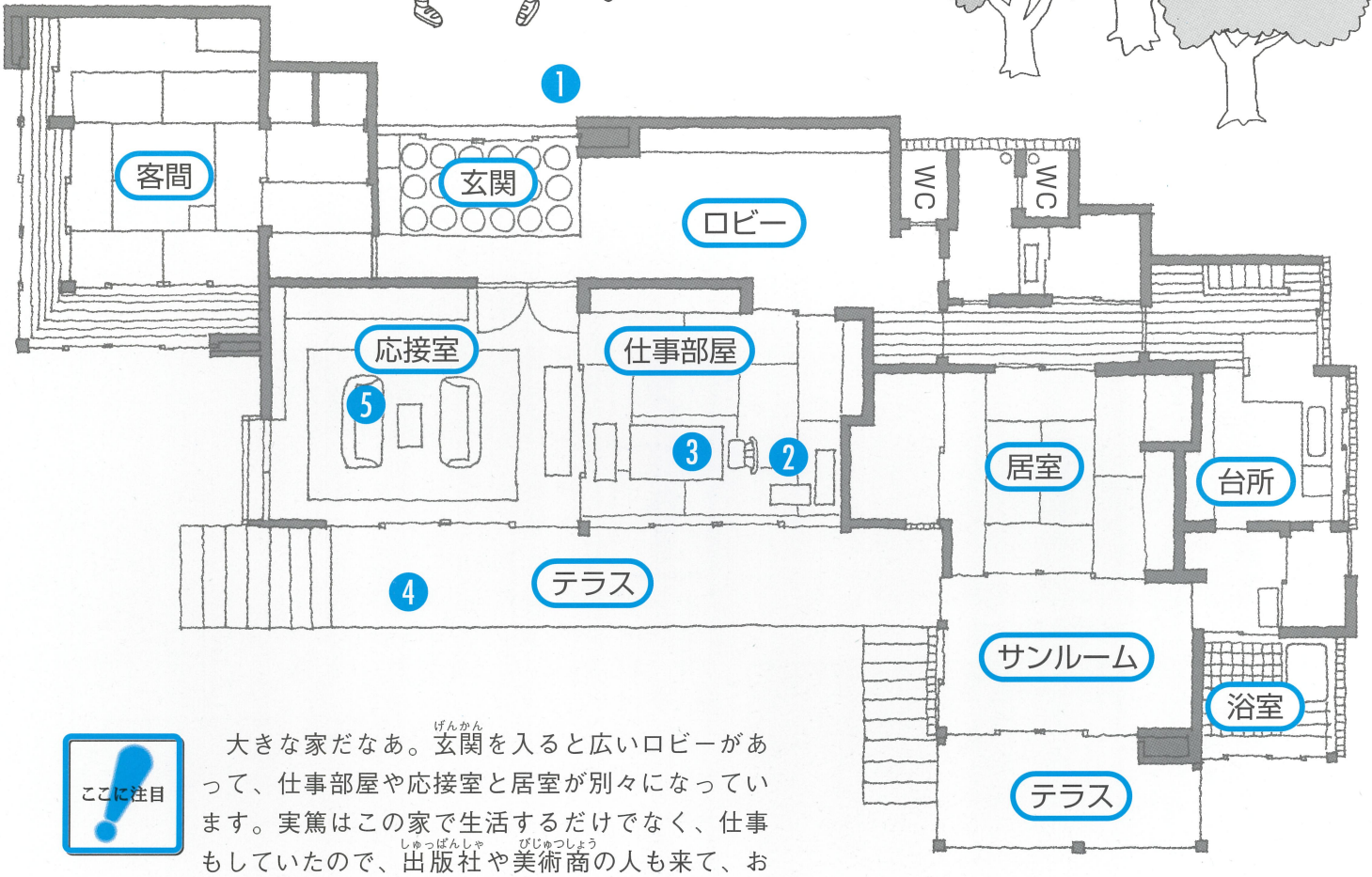
もっと知りたい 武者小路実篤

実篤の家をたずねよう

実篤は70才から90才で亡くなるまで、
昭和30年～51年（1955～76年）の間ここで暮らしました。
どんな家かな？ ここで何をしたんだろう？
あなたがお客さまになって、たずねてみよう。







ここに注目

大きな家だなあ。玄関を入ると広いロビーがあって、仕事部屋や応接室と居室が別々になっています。実篤はこの家で生活するだけでなく、仕事もしていたので、出版社や美術商の人も来て、お客様が多かったからです。ファンがたずねて来たときも、実篤は気さくに会って話しました。

写真の場所はどこ？

写真の場所は、図面の１～５のどこかな？

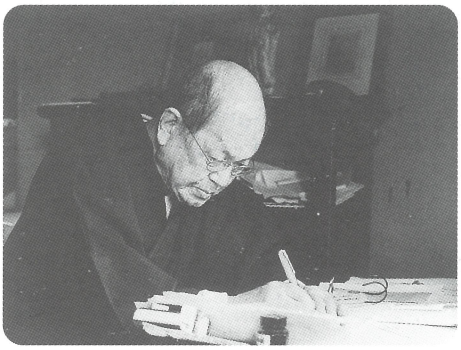
実篤と安子夫人　昭和43年ころ

この仙川の家では、奥さんの安子さんと二人だけの穏やかな毎日でした。

絵巻物を見る実篤　昭和47年

実篤は、世界中の古代から現代までさまざまな美術作品を見るのが、何よりの楽しみでした。自分で集めた絵や彫刻を身近において毎日鑑賞し、画集もたくさんもっていました。

家の前で　昭和40年代



原稿を書く実篤　昭和30年代

ヒント

次の写真と同じ部屋だよ。絵は大きな机、原稿は小さな机でかいていたんだね。

実篤は、それまでやってきた文学の仕事の最後の仕上げをしようと、この家に引っ越してきました。ここでは、代表作のシリーズ〝山谷もの〟の小説のほかに、自分の人生の回想や、たくさんの詩を書きました。

調べてみよう

〝山谷もの〟って何だろう？『もっと知りたい！武者小路実篤』４と12を見てみよう。

絵をかく実篤　昭和30年代

カボチャやジャガイモやさまざまな花をかいた実篤の絵。その大部分はこの家でかいたものです。

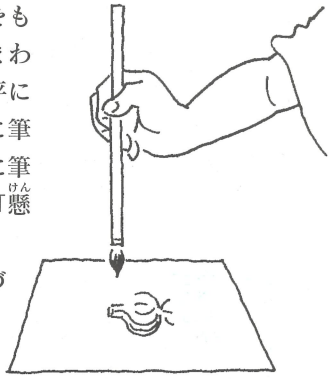
ここに注目

実篤はかくものを目の前においてしっかり見つめてかきました。次々にかきたくなるので、周りにいろいろなものがあるのです。

知ってる

実篤は絵をかくとき、筆をもった手のひじをついてしまわないで、腕を紙に対して水平にたもち、筆を紙に垂直におろして、常に筆の先がかいている線の中心を通るように筆を使いました。このような筆づかいを「懸腕直筆」といいます。

実篤の絵の力強い線は、こういう筆づかいから生まれたのです。



やってみよう

懸腕直筆でかいてみよう。
早くかける？ ゆっくりかける？
どんな線がかけた？

発行日／平成15年8月1日初版　平成21年7月24日再版　発行／調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
企画・編集／調布市武者小路実篤記念館運営事業団　デザイン・レイアウト／今井三樹男　イラスト／矢口由美子
再生紙を使用しています